

であい

Northern Regions Center (NRC)
 社団法人 北方圏センター

北方圏センターでは平成8年以降、小・中学生や地域の人々と海外からの研修員が交流する国際理解促進事業を展開しています。その中で、北海道の西岸にある積丹半島の景勝地、積丹町の小・中学校での交流が今年で10年目を迎えます。



井平忠行教育長



笠谷誠
 学校教育課長

2001(平成13)年9月に、北海道で受け入れていた研修員16名を引率したのが最初でした。美国、幌武意、日司、入舸、野塚、糸別の6小学校(※)と美国中学校の児童・生徒が留学生の母国や日本の遊び、ゲームなどで交流しました。それから10年、途中から留学生も参加し、町、町教育委員会、学校関係者、地域の人々の熱意と努力で継続してきました。

先頃、教育委員会に井平忠行教育長と笠谷誠学校教育課長のおふた方を訪ね、お話を伺いました。「子ども達は研修員の国や挨拶の言葉を勉強して、研修員の来校を楽しみに待っています。小規模校ばかりなので学校を挙げて受け入れてきました」、「地元の父兄も餅つきなどをして歓迎してくれます」、「研修員も自国のことを話すのは楽しそうな様子でした」とこれまでを振り返って下さいました。

(※) 全校児童数が10名以下の学校もあるいずれも小規模校。現在、小学校は4校になっている。



特集

積丹町の国際理解教育

海外研修員との交流を続けて10年

訪問した参加者の声

「北海道は寒いけど、人は温かい」

『一番そう思ったのは積丹町での交流に参加した時でした。私が訪れた野塚小学校は生徒数が7名。最初、子ども達は恥ずかしそうにしていたのですが次第に一緒に遊んだり話をしてくれました。印象的だったのは、初めての場所なのに懐かしさを感じたことで、自分の育った国とは反対側の場所なのに故郷に帰ったような安心感がありました』(前原みほシルヴィアさん バラグアイ出身 平成21年野塚小学校訪問)



パラグアイの研修員前原さん

「同じプログラムをロシアでも」



ロシアの留学生アレクセイさん

ロモノソフ・モスクワ州立大学の大学院生で現在は北海道大学に留学中のアレクセイさんは、『積丹で行われた交流の最初の日、日本舞踊を見せてもらいました。翌日、私は美国中学校で自分の国を紹介したり、生徒たちと話し遊び、楽しく過ごしました。この時、帰国したら自分の大学にいる各国の学生を地元の学校に連れて行って同じような交流をしようと思いました。積丹での思い出は、日本での素晴らしい印象としていつまでも私の心に残るでしょう』(アレクセイ・コレネフさん ロシア・モスクワ出身 平成21年美国中学校訪問)

で楽しかったからでした。教育委員会の方の、「短い時間しか一緒に過ごしていないのに研修員が帰る時には号泣するんですよ」という言葉に子ども達にとって交流のひとつときや研修員との出会いがどれほど楽しかったのか想像できます。

参加した児童の声

『前の日はドキドキして、夜あまり寝れませんでした。朝、学校に行く時、どんな人かなと楽しみいっぱいでした。会って質問をしたら、フルーツは日本とほとんど同じと聞いてびっくりしました。みんなで花いちもんめをしてとても楽しかったです。帰るときに、クラスのみんなの名前を一人ひとり、言ってくれました。とても楽しい思い出になりました』(山崎紗夜さん 美国小学校4年生 バラグアイからの日系研修員との交流に参加)

積丹町内の小・中学校で過去9年間、延べ916人の子どもたちがこの国際理解促進事業に参加しました。近年は町教育委員会が研修員などを招いて交流を続けています。札幌にいる研修生や留学生にも地方の町へ行くことは大好評です。自然が豊かで海の幸、山の幸に恵まれた積丹町での交流は代々「SHAKOTAN」と言い伝えられ、毎年の研修員は楽しみにしているようです。地元の国際化の一助になり喜ばれたことは北方圏センターにとっても嬉しいことであり、今後も未来の宝である子ども達や参加外国人の心に残る体験になるよう、この事業を応援したいと考えています。



積丹ブルーの海をいく水中展望船「ニュー積丹号」。船底から海底が見える。(4月下旬～10月下旬運行。積丹観光振興公社 電話0135(44)2455) 写真提供・積丹町

南アフリカでのサッカー・ワールドカップ。決勝トーナメントの日本対パラグアイ戦で、積丹町にはパラグアイを応援した子どもたちが居たようです。それは前の年にパラグアイ出身の研修員と会っ